



芭蕉句選
上



存し又雜語といふはあま
其さへ唐にこそ多しあま
又和殺のあまはあま何れ
其のあまあまあまの向
洋區よりあま間高上其の
阿まあまあまあまあま
結く語よりあまあまあま
あまあまあまあまあま

一

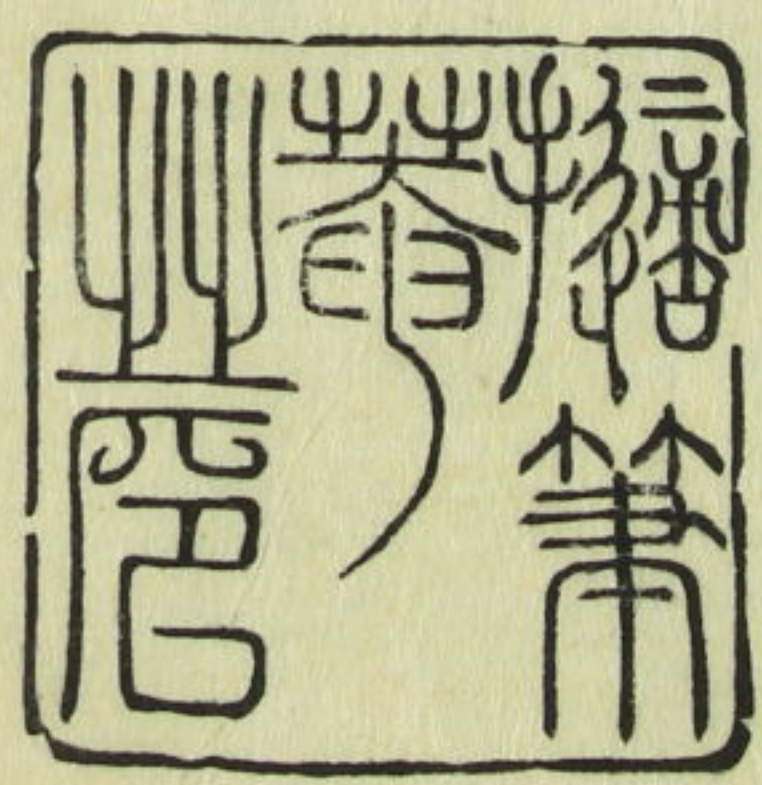
自在の〜の賤中の短才多
曲詩の〜の是〜の是
思ふ〜の筆〜の愚あ〜
彼は〜の草木鳥獸の如く
と〜の體あ〜の自享元
の頭は風林〜の又
味〜の句找〜の森青の
海上人の鬼〜の杜舞師。

傷た〜の五七の句
〜の句
此道〜の風國の
滔々集た〜の足
支考と愛と飽〜の
有〜の
思〜の
〜の

志のついでに、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、
四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、
五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、
七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、
八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、

ゆゑに、彼乾坤無位の
置、目録二人、
の、
同志の友、
五表井、
不作信、
而、

惟昔え文を成平はく一達生の
 日擲筆菴主人自序
 一



凡例

- 一 四季の題を大概玉海集此の書も小擬
ひちち季乃難を其季の末小裁寸
- 一 連歌は月ひさる題ハ愚意をよせく
て類の所く小記ス
- 一 月花はむしひまを句をそ句意と量
く難れ部小入れ
- 一 此集小引用る書間字をもしつれし鳥

馬馬乃誤りし事と也

一 け集衆人の見ふ觸く後校合の委
かきさるると知因て再校し粗その誤と補
かて猶後人之参考紙傳

春之部

蓬萊の山も伊勢の山も
幸も猿も世も猿の面
之日も田毎の日は
誰やうも伊勢の朝の
多れ人もあはれ
さあ新玉の
おはれ酒
おはれ酒
おはれ酒

越人特尾冠
仙合也新年
おはれ酒
おはれ酒

二日よりのめりりせしおらたせり
湖沼結雪の菴のまき枝むらさき

三日閉口 題四日

又浮絵結雪のうらめしむゆ
草花弱よりかきききりひの菜うま
一とまに一夜はまうかた川おお
まきまてはまこ九日おまらあ
まきあれせり名もあま山の朝霞
大日枝や一枝引けり一りゆき
ふりまきまのゆめまきまの桜はえ

大日枝や一は白の
比あるより一り人
ゆめまきまのゆめ
まきまのゆめまきま

うらめしきまの柳はり枝のまき
梅の香ふのり目おまらあ
山望まきあまらけりまきら花
人のまきまのまきまのまき
春もまきまのまきまのまき
梅白のまきまのまきまのまき
子に館のまきまのまきまのまき
所子に館のまきまのまきまのまき
銭乙州東武行

梅若菜はまきまのまきまのまき

梅若菜

細代民部はるのうら

梅の木も花もさうり木ももむさぶら
さくさくの花のうら
旅のうらと古葉も花も葉にうら

昔はむさぶ

暖葉は奥のうら
人ほのうら
るのうら

忘るぬさ敷の中は家梅の花
防川亭

後の小文より
あは

香城さう家梅さうさうら
子さうさう梅おのさ
香ふ自のさ
何さ新八も
父梅花許さう
あささ
は

梅さうさうさう
る梅さうさう
凍さうさう

初年一狐の刺一あはけられ
涅槃とて女殿の言する様敷き

伊勢物語

神の心も思ふにけし涙涅槃像
不世にやうあ敷きけし素の雨
春雨や蜂の巢はけふ家根の履
ま雨共木下にけし家一はけり
かきけし小枝のけしけし梅柳の
八九のけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけし

後の小文も昔法あり
題ありて本下よき
はぬれとけし
イニ色しけし

雪の代魂の福ある、嬌弄
のけしけしけしけしけしけしけし
梅柳のけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけし
あけしけしけしけしけしけしけし
陽気はけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけし
文とけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけし
花のけしけしけしけしけしけし

命書上

よ〜野よ

花さうさうしうははあけ

園城のあ〜

おら〜花よ

湖の眺

幸勝のねさ〜

〜おき花さうさう

人〜暮〜

〜あ〜

松信をさ〜

四の又器は接り

又和の園子尾村

花の陰梅〜

伊賀はあ花垣の

ちんちん梅子料

〜あ〜

一里さ〜

〜あ〜

檀の木〜

あ〜

句選上

桃もつる百負素き、さうり部浄より小しうなれば
句し

親きおのゝと見えぬは花の香
さうも富ふもいそひたれむとせむ

イノロと花に花をばさるおのほりてあはれあはれ
はすあふふふふふふふ
七白ま別あつても及人四すゝりとも入て湖中へ海
ふあふふふ

鶴下りまゝ七口花をるおのほり
東行 饒別

此さう言推せよと花の又器一具
そぬるおのほりもはらうと琴の塵
露沾るゝゝ

西行結菴も何んぞ花をる海

伊勢神清樂

河津木の花もあつて白ひら

二見此園花を待りて

いかにあ湖はるも浦はる

櫻もあ花と解とて海ふせぬ

さうもあ花もあ花もあ乃心よ

花の小舞もあれもあつて公の舞は果

景清もあ花のさなうと七言

物皆自得

上

花小梅も花あけくひと友よめ
蝙蝠も出よめ世おとよふ鳥
何だましく僧もさしり花の面

都門あけ

都門のさ花や上戸はま産せん
酒のさあかきんうは産のさ

憂方知酒聖貧

覺錢神

花あけを我酒公く食ら
程芽やさおさうり我まかりて

小文庫より
上より

木は本ふけも能くまをらるる
まのまは梅よのそは花のさ
新くぬぬ白く出よ梅さうり
空申に花の中さまはさるる
何あめよと酒もお新也教梅
山櫻月あけのささあけ
櫻狩もささあけさあけ
さあけさあけ梅もささあけ
故主蟬吟も花庭前よ
さあけさあけ梅もささあけ

上

くら家

鶴居冠よの序
の心算とて入る

鶴居冠よの序
あはれに世に我れ強き故人の世
命あはれに世に我れ強き故人の世
加州白山奉納
うき世に強き故人の世
あはれに世に我れ強き故人の世
かたはれに世に我れ強き故人の世
卯の捕らぬあはれに世に我れ強き故人の世
うき世に強き故人の世

あはれに世に我れ強き故人の世
かたはれに世に我れ強き故人の世

蛭子讚

あはれに世に我れ強き故人の世
かたはれに世に我れ強き故人の世
あはれに世に我れ強き故人の世
かたはれに世に我れ強き故人の世
あはれに世に我れ強き故人の世
かたはれに世に我れ強き故人の世

いそがしき世に我れ強き故人の世

あはれに世に我れ強き故人の世
かたはれに世に我れ強き故人の世

向卷上

松竹梅

松竹梅の目も心も
すまふ人より懐も
福ね

とよみはるも任心も代と離の家
青柳の心もあつても
永まふも我情もたつても
茶中や物もあつても
やまの情もあつても
おろり留中お拍もあつても
おろり留中お拍もあつても

夏の日又と暗
~~~~~  
~~~~~

野山

父母はあつても
蛇ふかともつても
雀子ともつても
蝶のおもつても
起るも我の友も
古也やおろり留
這出よおろり留
二股よおろり留
同友よおろり留

梅

言を結ばず
ふつとけし猫乃
まじりていふこと
是かろや

まこと集く林の
白くしてぬの眼なり

藤の角先一ゆらり乃あまきりか
猫は毒蜜の崩るるまじりていふ
まじりていふこと
猫の意やむらぬ乃月
ふ路まきゆやうやう草草

悼一呂丸

あゆみよりあゆみぬハ探の草草
古畑の草はけしり男とて
いりくのふも終りてまき乃ま
木もも情やまやまぬまき乃ま

後66年ちの66年

結ぶれまおつまの夜は恒福の夜

菩提山

山寺は想つてははらよ草草
草草とけしよまじりていふ
若りつるまの夜のみあはれ目扱
ほしけしよまじりていふ

大和の神の歌

山寺は想つてははらよ草草
山寺は想つてははらよ草草
山寺は想つてははらよ草草

金澤上

山吹のあけ葉のあけはらちのあけ

望湖水惜春

以青枝のあけはらちのあけ

前途のあけはらちのあけ

あけはらちのあけはらちのあけ

のあけはらちのあけ

行まよるあけはらちのあけ

あけはらちのあけはらちのあけ

二月十七日 神洛山城出る

あけはらちのあけはらちのあけ

子と腹くち中人あけはらちのあけ

あけはらちのあけはらちのあけ

あけはらちのあけはらちのあけ

あけはらちのあけはらちのあけ

言来云 係ナシクノ誤カ

尚羅

追

追

加 句選彫刻は事見陶の句哉
拾つて追加の例と記す

老傭

崎よりまゝ海若地と老は青もせ
去るる魚も價あはれしと此は
は白打の海老もははは名を
留めてし今も愛はさしは

鶴の巢もくくもはたは素越の
阿蘭陀も存よ事おりのる小靴
州宿は死打て海くんの梅

富士

富士小紅橋下から丸太出
海へ海小水二節一節り心橋

夏之部

花の川程を後よかひぬ衣うへ

日光よそ

後の小文よそあはれ
くわら
けつり
あまのねらふかきけり

何とちととと書きたるあはれあはれ日の光
まらふあはれと神目あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

昔の舎は画讚

津さくさあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
逢龍尚舎

尚舎

夏の小文草のあはれ
ふくしりま

十二

とけり石を先とふ秋のさゆふ哉
藤のさゆづよりま 哉よりふ

さき岸まお奥より

木啄も産る屋あつてはらまを立

浪麿の浦一見の時

浪麿まよひぬ笛まよひ木下園

幻住菴より

先もあはれか推の木もけり反も立

たけあつてふも縁るひさしりぬ

山崎宗鑑の回縁

かゝるれまゝにたきうたふらん

こゝろの相あふ子々海ありて

今やしらしまにちらんまよひ

牡丹葉のうらふあはれはかみ縁ふ

桃隣新定自画自歌

あつてはあはれも牡丹はれたの蜜

うらまあやうた柳の及ち

あはれも大願和あま〜瞳目

あつてはあはれ〜縁ふ

縁もあはれはまはれせ〜うら

向選上

十二

本はまの頃清き也古た硯石
しは我をけしうの世ようんご為
らんうりと何あちや雨乃の花雪

扇柄金

袖のふかむしはぬふ料理の間
海士は静しううるむのう

贈社園子

ふまゆふ羽をく操らうんて歌

おか田の螢見

あはれあひんやあひの酔いさそあ

いと料理

愚ふくくくは茨つらむに螢うれ
るあのふ系はるるを花雪ふ
こらあは木こは螢やさるう霜
我うふか奴のうさむたむは
こは境をいわう家あこい
さの事うや

鴨牛角のうさむたむは
しあ人の旅もあつたむらじ種
日流よさるたれを封人のあふ
とらあふと金とあふに口風あ

何れとてあさ山中又逢ふ
 夜に眠くとも夜に眠るは旅に
 竹の子や稚とたの信は
 竹の子を教へて我れ
 竹睡目
 竹の子とて来植る日は
 奥別今姑志く川又出る
 早苗のうらやまをいふ
 志はふ指の右を
 竹の子のうらやまをいふ

後日又集すれ
 伊母の句ありて
 何れとてあさ
 竹の子を教へて

渺々と尻をいへる田舎
 清あうらやまをいふ
 何れとて田の畔は
 田一枚してまき
 風流のうらやまをいふ
 名護
 在旅に代りく小田
 五月のうらやまをいふ
 竹の子を教へて
 竹の子を教へて

またねとて此浮草とてわらわの

大井川の出水の留田塚幸成の

おとこをうりて

五つ雨は空の吹かす世大井川

八人堂屋より立ちあふまゝの川

おとこをうりて

又月とて我集てとて一室上川

経堂と三将の像とゆへに堂

三代は槍をかきぬとて此佛を

安んずる

白紙集の白紙書
題してははまらぬ
一とてはまらぬ

かゝるれは侍のさしぬとて堂

酒は堂顔破

又月とてやみ布をさする蟹は

友申お実方お塚は

是はねとて月乃の

岩根の園越

目とてお家時を

是は経は太刀お実の

おとこは什物と

爰も太刀は又月乃の紙織

春一は梅の海に魚を置きて
送る目録の深結する中鞋
二足残すれは風流の

のたふふあつてはあまの

葛蒲州 足もつらん草の強

稼ゆふ序子にしんま 額髪

正成之像 殺肝石 此人之情

なま〜あふか縁洞や楠結露

國彼〜ふの何と城素ゆて

あまき〜らあまき〜らあまき〜の

〜の海〜あ〜の海〜の海

友事や兵〜の事乃 詠

殺生石

石乃〜事や〜友事や〜の海

乃〜事や〜誰〜肌事〜ん紅の花

眉掛を傳ゆ〜と 紅きるる

己百亭

あ〜の昔ん 藝事杖〜あ〜の日記

あ〜の昔ん 人ふた〜む〜た〜ら〜反〜

陸奥ふ〜ら〜ん〜ら〜下〜

あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に

あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に
あまきく旅立ちの途に

伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に

伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に
伊豆の山に

友をくわむかはるゝのらん花
宗祇のあしにむかふ

友のあま、遊借のせん花は花
徳はまも花はあまの徳は花は酒
宗祇のあまの徳は花は酒
あまのあまの徳は花は酒
象陽のあまの徳は花は酒
作六のあまの徳は花は酒
旅人のあまの徳は花は酒
あまのあまの徳は花は酒

西す淨土へ便あつとる基
善菩薩の一生杖も柱あつとる
木を圓縁のあま

世の人をりて花はあまのあま
あまのあまの徳は花は酒
あまのあまの徳は花は酒

水鶴のあまの徳は花は酒
あまのあまの徳は花は酒

あまのあまの徳は花は酒
あまのあまの徳は花は酒

撞鐘もさくさくさくあり蟬の音

山形願ふまゝの音さくさく

あゝ佳景寂寞さくさく

さくさくさく

園さくさくさく入蟬はさく

盤赤さくさくさくさくさくさく

さくさく

園さくさくさくさくさくさく

白石夜泊

晴さくさくさくさくさくさく

陸奥さくさくさくさくさく
波も塵おさくさくさく
友のふたよめさくさく
白石集さくさくさく
さくさくさくさくさく

友の月所油さくさくさく

大井川さくさくさくさく

月さくさくさくさくさく

あゝさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさく

湖や暑ささくさくさくさく

さくさくさくさくさくさく

はくさくさくさくさくさく

丈山の像

さくさくさくさくさくさく

あつたむらさしき暮掛てらるるあつ
たむらさしき福多ふしむらさし
暮掛てらるるあつたむらさし

海にさくつらぶるは川の鮎鮎
おほむらさし山さくつらの鮎の鮎
ねむらさしむらさしあつたむらさし
福倉代むらさしあつたむらさし
あつたむらさしあつたむらさし
葉のさくつらぶるは川の鮎鮎
あつたむらさしあつたむらさし
あつたむらさしあつたむらさし

海にさくつらぶるは川の鮎鮎
岐阜山

異はむらさしあつたむらさし
城河むらさしあつたむらさし
海にさくつらぶるは川の鮎鮎
あつたむらさしあつたむらさし
あつたむらさしあつたむらさし

野明亭
海にさくつらぶるは川の鮎鮎
あつたむらさしあつたむらさし
あつたむらさしあつたむらさし

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

目録

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦

海軍の戦艦

海軍の戦艦は海軍の戦艦である

海軍の戦艦

秋の美は心の海を回る
 舟の残るは舟の心
 友の友をよめる
 梅のまねの二木は二月越
 友をよめる
 夏山は足跡をよめる
 ありとも
 語らば

追加

晋子、母追善

卯姑をたも母をた宿を冷し支

甲斐山中

山賊のけしき
 けしき
 自若子也時雨乃花姑
 社
 若くは

夕暮に
人を見送る
静かなる
夜明け

